



学校名：阿賀町立阿賀津川学校

氏名：石黒 富久美

[担当教科:英語]

● 実践教科等：道徳

● 時間数：8時間

● 対象生徒：中学校3年生

● 対象人数：30人

1 単元名

世界とつながる日本 ～共助・共生の関係を目指して～

2 単元の見目標

- ① ザンビアの学習を通して、相互依存の関係を知り、異文化を理解しようとする態度を育てる(多面的・総合的な思考力)
- ② ザンビアをはじめ、世界が抱える問題について知り、持続可能な援助の必要性に気づく(未来像を予測して計画を立てる力)
- ③ 自分にできることや生き方を考えながら、自分自身と向き合う。(自己の生き方の追究)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・日本とザンビアとの文化、地理、経済、価値観等の違いに気づく。【多様性】
- ・日本と世界の相互依存関係に気づく。【相互性】
- ・地球をとりまく自然環境やエネルギーは有限であり、資源を大切にすることは自分達の未来につながっていることを理解する。【有限性】
- ・ザンビアで活躍するボランティアの方々を紹介し、互いに連携・協力・共助することの大切さを理解させ、発展途上国が抱える課題を解決するために何ができるか考えさせる。【連携性】【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

道徳の学習指導要領[中3](4-10)「人類の幸福」、「国際平和」に該当する。本実践では、生徒がザンビアをより身近に感じることができるよう、現地で撮影した画像や動画をたくさん使い、現地の様子や現地で活躍する日本人の方々を紹介することで、遠くに感じていた「国際協力」が、身近に感じられることと思う。また、日本の行っている「持続可能な社会づくりの支援」を知ることで、ザンビアと日本のつながりは未来まで続いているということ、その支援は日本にも還元される win-win の関係にあるということを理解させたい。日本の行っている支援に触れることで、「困っている人がいたら手を差し伸べたい」「救える命は救いたい」という、人としての生きる姿勢を感じとらせ、国際貢献に目を向ける素地を育てたい。

(2)児童生徒観

授業対象は中学3年生であり、もうじき義務教育終了の節目を迎える。中学3年ともなれば、国際協力、国際貢献の大切さについて考えられる歳である。しかし、日常生活でその正義感と思いやりを行動に表す機会は少なく、JRC 委員会を中心に、募金活動、ペットボトルのキャップ集め、地域のゴミ拾いなど、単発的な活動にとどまっている。他国を知ることとは自国を知ることにもつながる。今、世界ではどんなことが起こっているのか、世界平和に向けて自分達にできることは何か、人類が互いに助け合うことの意義とは何か、について考えさせたい。それが国際貢献の根幹になると考える。

(3)指導観

- ・本校の研究主題である、「主体的に学び続ける生徒～教えて考えさせる授業～」の達成を目指す。課題を提示し、推測させ、考えさせ、意見交換させ、疑問点、関心を十分もたせてから、事実を提示するようにする。その手段として、班活動を取り入れ、全員が話し合いに参加する場面を盛り込む。人前で自分の意見を言うことを苦手としている生徒もいるので、本音でフリートークができるよう、班長に話し合いをリードさせる。他の意見に耳を傾け、認め合う姿勢の育成にもつなげる。
- ・1時間、1時間、授業の感想と質問を書かせるようにし、できるだけ出た質問に答えることで、興味・関心を次につなげるようにする。

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	・ザンビアを通し、世界の多様な文化、価値観の違いについて、理解を深めようとしている。 ・発展途上国が抱える諸問題に気づき、問題意識をもつことができる。	・貧富の格差や環境問題の構造的なつながりが理解できる。 ・なぜ途上国に教育や支援が必要なのか追究することができる。	・資料(フォトランゲージを含む)から、必要な情報を読み取ることができる。 ・課題解決の方法について考察し、自分の言葉で他者に伝えるように発表できる。	・発展途上国の課題や JICA の支援、国際協力についての知識を身につけている。
評価方法	学習の様子・発言・ワークシートの記述・質問・感想・アンケート結果			

6 単元の構成

時 限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	・ザンビアについて知る ・都市部と農村部の生活の相違	・ザンビアの位置、気候、衣食住等に興味、関心をもつことができる。 ・都市部と農村部の大きな格差を理解する。	・地図でザンビアの位置を確認し、画像や三択クイズ等で、ザンビアについて知る。 ・フォトランゲージを行う。都市部、農村部それぞれの写真から気づいたことを班ごとに発表させる。
2	・日本と発展途上国とのつながり、日本とアフリカ(ザンビアを含む)とのつながり	・日本は資源や食料をどの国から輸入しているのか知り、発展途上国(ザンビア)ともつながりがあることを理解する。	・日本の身近な物や食べ物を例にあげ、↑それぞれの材料の輸入源を推測させる。 ・アフリカのマップ上で輸出品を確認していき、日本は発展途上国とつながりが大きいことに気づかせる。
3	・ザンビアの教育事情とザンビアが抱える課題の把握	・日本とザンビアの学校事情を比較し、発展途上国の厳しい教育事情を知る。 ・子ども達が学校に行けない原因を考える。(負の連鎖)	・発展途上国の就学率、卒業率、教員数、学校施設、カリキュラム等の情報を提示し、教育環境に関心をもたせる。 ・課題①、②について班で話し合い→発表 ①学校に行っていない子ども達は日中、どのように過ごしているのか。 ②物を売ったり、家の仕事を手伝わなければならないのはなぜか。
4	・日本の発展途上国(ザンビア)への支援体制	・負の連鎖を断ち切るにはどうしたらよいか考える。 ・日本の支援体制について理解する。	・課題①、②について班で話し合い→発表 ①学校に行けるようにするには何が必要で、どういう状況、環境になればよいのか。 ②途上国を誰がどうやって支援するのか。 ・視察した訪問場所の画像や写真を通して ODA や JICA の活動内容を紹介する。
5	・「共助・共生」の大切さ	・日本は借金を抱えていながら、なぜ発展途上国に支援するのか考える。	・win-win の関係、持続可能な支援の必要性などについて理解させる。
6	・世界が抱える現在の課題・将来の危機を把握	・今の我々の生活が何を引き起こしているか、将来どんなことにつながっていくかを知り、自分の生活を振り返る。	・画像や映像を見せ、現在地球で起こっていること、将来起こりうることに関心をもたせる。 ・今、自分達にできることは何か、班で話し合わせ、発表させる。
7	・ザンビアのもつ素晴らしさに触	・ザンビアの自然、動物、伝統文化等を紹介し、保	・画像や映像を通し、どの国にも長い年月大切に守り続けてきた生活や文化、伝統

	れる	全の気持ちを育てる。	があることを紹介する。
8	・地球人としての これからの生き方	・同じ中学生がどんなことを考えや夢をもって勉学に励んでいるのか知る。 ・今後、日本がやるべき支援、自分がやってみたい支援について考える。	・ザンビアの女子中学生のアンケートを紹介する。(自国をどう思うか、将来の夢、日本の印象、欲しいもの・・・) ・ザンビアで活躍している方々から日本の学生に向けた画像メッセージを紹介する。

7 授業事例の紹介

小单元名【日本の発展途上国(ザンビア)への支援体制】

(1) 指導案

- (ア)実施日時 12月4日(金) 第4限・・・4 / 12月7日(月) 第5限・・・5
(イ)実施会場 3年2組教室
(ウ)本時の目標 4・ODA(政府開発援助)とJICAの存在、支援体制を理解する。(知識・理解)
5・なぜ、発展途上国を支援する必要があるのか考え、発表することができる。
(思考・判断・表現)

- (エ)指導のポイント ・パワーポイントで画像を使い、説明を視覚的に捉えやすくする。
・本校の研究主題である、「主体的に学び続ける生徒～教えて考えさせる授業～」を目指し、班活動を取り入れ、全員参加型の授業を目指す。

(オ)12月4日(金) 本時の展開・・・4

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価基準・評価方法)
導入 10分	[前時の復習] 発展途上国の学校に行っていない農村部の子ども達の現状や負の連鎖について振り返らせる。	・次の①②の発問に対する各班から出た意見を確認する。 ①「学校に行っていない子ども達は日中何をしているのか」 →水くみ(生活水が入手困難) →妹弟の面倒、農作物、家畜の世話、物を売り歩く(家計が苦しい、働き手が不足) →病気で寝ている →戦場で戦っている	一斉	・パワーポイントを使い前時の授業内容を再確認させる。 	前時学習したザンビアについて、内容を振り返り、その劣悪な現状を真剣に受け止めているか。 (学習態度)
				・資金や物資の援助だけでなく、人が係わって支援することの必要性に気づかせる。	
		②「子ども達が学校に行けるようになるために、どういった物や生活環境が必要なのか」 →学校・・・教具、教師 →病院・・・医師、看護師 →水道・・・浄水設備、技術者 →農業改革・・・機具、指導者 →産業開発・・・経営指導者、技術指導者			

展開 30分	支援とはどうあるべきか考えさせる。	発問「課題を抱えた発展途上国を誰がどうやって救えばよいのか」 [班で話し合い→発表] ～予想される生徒の反応～ 誰が→金持ち、先進国、国連加盟国、ユニセフなど 何を援助→資金、物資、技術 どうやって→技術者、医者、教師を派遣	班	・「共生」という理想を実現させるためにはどうしたらよいのか、考えさせる。 ・班長が司会進行・発表	・真剣に考え、話し合いに参加しているか。 ・他の班の発言を尊重して聞いているか。(学習態度・発言)
	日本の支援活動を紹介する。	・画像を見ながら、現在行われている日本の支援組(ODA、JICA)の存在とその活動内容について知る。 ・ザンビアでは、実際に誰がどんな活動を行っているのか知る。	一斉	・パワーポイントで説明 ・視察現場の画像を紹介	・関心をもって画像を見て理解に努めているか。
まとめ 5分	振り返りシートに記入する。	・わかったことや感想、質問をシートに記入する。	個人		シートの記述

(オ) 12月7日(月) 本時の展開・・・Ⅱ

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価基準・評価方法)
導入 5分	前時の学習内容の確認	・前時の授業の生徒の感想、質問への返答を聞く。	一斉	・いろいろな感想や意見を紹介する。 ・パワーポイントを使い生徒から出た質問に答える。	・他者の考えに真剣に耳を傾けているか。(学習態度)
展開 35分	支援は一方通行ではなく、win-winの関係にあることを理解させる。	・日本がいくらくらい借金を抱えているのか、これまでに開発援助した国や地域はどれくらいあるのか知る。 発問「日本はたくさん国債を抱えていながらも、なぜ支援し続けるのか」 [班で話し合い→発表] ～予想される生徒の反応～ ・人として当たり前のこと ・武士道、日本人魂 ・優位に立ち、名声を得る ・将来、利益につながる	班	・パワーポイントを使いクイズ形式で推測させる。 ・班長が司会進行・発表	・話し合いに積極的に参加し、他者の意見を聞いて自分考えを更に深めようとしているか。(学習態度・発言)
		「支援は地球環境の悪化、感染症などの拡大を阻止する」 「発展途上国と相互依存の関係にある日本にとって、支援は日本自身を守ることにもつながっている」「支援を通して築かれた信頼関係は世界平和につながっている」・・・など、win-winの関係にあることを理解する。	一斉	・パワーポイントで、画像を用いてまとめ、わかりやすく説明する。	・集中して画像を見て、支援することの意義を理解しようとしているか。(学習態度)

	「共助・共生」の大切さについて関心を深めさせる。	・ 阪神淡路大震災や東日本大震災時、日本は諸外国からたくさんの支援を受け、そのおかげで今があるということを理解する。	一斉	・ パワーポイントで日本への支援国を提示する。 「目の前で誰かが困っていたら助ける」という原点に立ち返らせ、世界の平和・発展に目を向けさせる。	
まとめ 5分	振り返りシートに記入する。	・ わかったことや感想、質問をシートに記入する。	個人		シートの記述

(2) 授業の振り返り

- ・ 生徒は高い関心を示し、毎時間、質問がたくさん出た。

＜生徒からの質問の一部＞

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 水をくむためにどれくらい歩くのか ・ なぜ靴を片方しか売っていないのか ・ 学費はいくらか ・ なぜザンビア政府は政治を改善しないのか ・ なぜ都市部と農村部でこんなに差が広がったのか ・ 日本の他にザンビアを支援している国はあるのか ・ ザンビア国民は自国をどう思っているのか |
|---|
- ・ 1クラスで進めたので、時間の見通しが立たず、予定したところまで進められなかったこともあったが、自クラスだったので、授業時間をたくさん確保できた。8時間授業を継続したにもかかわらず、最後まで生徒の集中力が続いたのは、やはり生きた教材だったからだと思う。
 - ・ 1週間に1回、2回のペースで進めると、準備が追いつかない時もあった。3年生には今伝えないともう来年続きはないと思うと、あれも伝えたい、これも伝えたいと欲張ってしまった。その分、授業準備が大変だったが、生徒の質問に答えるために必死になって調べたことは自分の力となった。政治に関する質問は確信をもって返答できなかったのも、もっと調べたり、JICA 関係者の方々から教えて頂き、生徒に返していきたい。
 - ・ 生徒の感想に「日本は借金を返してから支援すればいいのではないか」という意見もあったが、東日本大震災で発展途上国であるアフリカからも支援がきたという事実を知り、「支え合い精神」の本質を理解できたようだった。
 - ・ 国際協力についての知識はたくさん深まったが、実践の面ではまだまだである。
 - ・ 現地で活躍されている方々からのメッセージの肉声がほとんど聞こえなかったのが残念である。スカイプを利用して連絡しあうことも考えていきたい。キャリア教育としてもよい教材であった。

(3) 使用教材 ※パワーポイントの画像の一部



サトウキビを売る少年



教材 なければ作ります！



ルサカ郡病院設立中 20億予算

(4) 参考資料等

- ・ 学校に行きたい！(独立行政法人 国際協力機構 広報室)
- ・ どうなってるの？世界と日本(独立行政法人 国際協力機構 広報室)
- ・ ひとりじゃ生きられないニッポン(独立行政法人 国際協力機構 広報室)
<http://www.jica.go.jp/aboutoda/interdependence/hitori/areastudy/area3.html>
- ・ 学校に行けない世界の子どもたち(独立行政法人 国際協力機構 広報室)
- ・ 外務省 外交政策 ODA(政府開発援助)<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/about/index.html>
- ・ 外務省 わかる！国際情勢 震災直後から続々と届く世界中からの温かく力強い支援
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol73/>

8 単元をととした生徒の反応/変化

- ・教育の大切さを知るとともに、発展途上国への関心が高まった。
- ・発展途上国と日本がつながっているということが理解できた。
- ・日本の支援体制を知り、何かできることを見つけて協力したいという気持ちが芽生えた。
- ・物資以外の支援の大切さや継続した支援の大切さに気づいた。
- ・環境を守ることは世界を守ること、つまり、自国を守ることにもつながっているということが理解できた。



<アンケートより>

- ①ザンビアで活躍する方々からのメッセージは 今後の人生の参考になった 30 人/ならなかった 0人
- ②海外研修の機会があったら 行ってみたい 23 人 / 行かなくてよい 7人
- ③「これはなくそう!」「なくなればいい!」

→戦争、紛争、銃、武器、少年兵、貧富の差、格差、差別、偏見、飢餓、いじめ、病気、菌、汚水、犯罪、泥棒、子供を悪用する大人、ポイ捨て、ゴミ、資源の無駄遣い・・・

<生徒の感想の一部>

- ・僕達に何ができるのか、考えさせられる授業でした。些細なことでもその積み重ねが大事なのだと感じたし、日本がしてあげられることはまだまだあると思いました。一緒に幸せになりたいと思った。
- ・先進国が発展途上国のことを知っても意味がないと思っていたが、それは間違いでした。写真や画像を見て発見がたくさんあった。真剣にザンビアを熱弁してくださってありがとうございました!
- ・青年海外協力隊が発展途上国に行き、活動していることに感動しました。自分も将来、災害などがあった場合、現地に行き困っている人を助けてあげたい。
- ・支援は未来にも続いている。ゴールを越えても走り続ける日本はカッコいいと思った。
- ・日本よりも貧しい国があることは知っていたけど、その国の生活まではよく知らなかった。今回、長くに渡ってでもこういう授業を受けられて良かった。自分達が幸せならそれでいいやではなく、世界の国々のことも視野に入れて、自分にできることは何かを考えていける人間になりたい。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

P<計画>	・学習計画を立て、授業のねらいを明確にし、毎時間の指導案を作成した。 ・その国について事前にしっかりと調べ、情報収集をしてから授業に臨んだ。
D<実践>	・理解しやすいよう、集中力が途切れないよう、スライド、動画、拡大写真等を用いた。 ・具体的な現地の様子や JICA に係わる方々からのメッセージを盛り込み、現実感、臨場感をもたせた。 ・教師からの一方通行にならないように、全員参加型の話し合い活動を盛り込んだ。
C<検証>	・事前、事後アンケート、自己評価、授業中のワークシート、感想の記述等から生徒の理解度をチェックし、次の授業で足りないところは補足するように努めた。 ・他教員から授業を参観してもらい、助言を次時の授業の参考にした。
A<改善策>	・今回は3年生だけが対象だったので、1年生から3ヶ年を見通した学習計画をもつ。 ・持続的に学校全体で学べるように、国際理解コーナーを設ける。 ・2学期末(12月)に授業を実施したので、知識の伝授で終わってしまった感がある。もう少し早い段階で授業を実施すると、次のアクションまでつながれたように思う。

10 教師海外研修に参加して

滞在中は、毎日が「見る」「知る」「感じる」「考える」の繰り返しであった。書物やメディアからではなく、「自分の目で見て感じる・体験する」ということの大切さを改めて痛感した。そして、「なぜ国際協力が必要なのか」の答えを見つけることができた。開発、改善、研究、学校教育等、国際協力にはいろいろな形があるが、それぞれの現場で具体的な実践を見せて頂けたこと、ESD の考え方を学ぶことができたことは本当に大きな収穫であった。現地で、使命感に燃え、日々奮闘しておられる方々の雄姿や、その方々のこれまでの生き方や今の道に進むきっかけとなった話など、大変感銘を受け心を動かされた。授業の準備は大変であったが、生徒の感想を読んで涙が流れた時もあり、授業をやってよかった、海外研修に参加してよかったと強く感じた。これから先も、国際協力や国際理解教育について研鑽を積み、授業、または何らかの形で、子ども達に伝え続け、ともに学び続けていきたい。